

笹川平和財団主催セミナー
生稲外務大臣政務官挨拶文

アッサラーム・アライクム（ベンガル語で「こんにちは」）。

外務大臣政務官の生稲晃子でございます。本日のセミナーの開催に当たり、一言、御挨拶申し上げます。

はじめに、笹川平和財団、日本 WHO 協会をはじめ、本日の開催に御尽力いただいた関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

今回、バングラデシュのラーマン首相とともに訪日されたズバイダ首相夫人の御出席を心からお喜び申し上げます。

ズバイダ首相夫人は、医師としての専門性を活かし、ストリートチルドレンやスラムの子どもたちへの教育、女性支援など、幅広い社会貢献活動に情熱を注がれてこられたと承知しています。

国際情勢が混迷し、特に脆弱な子供の保健が影響を受ける中、ズバイダ首相夫人をお迎えし、子供達の未来と日バングラデシュ協力の可能性について意見交換を行えることは、誠に意義深く、時宜を得たものです。

本日のテーマである保健・医療の分野において、日本とバングラデシュは、長い歴史の中で確かな信頼関係を築いてまいりました。

日本の ODA により、母子保健サービスの改善、非感染性疾患に対応する検査体制強化のための医療機材の整備などが支援されています。

私自身、昨年 2 月にバングラデシュを訪問し、シャヒード・スフラワルディー医科大学病院を視察しました。この病院では、日本の ODA を通じ、看護教育の質の向上のための技術協力等が行われてきています。

しかし、両国の信頼関係は決して「一方向の支援」によって築かれてきたものではありません。両国は、「戦略的パートナーシップ」の下、友好関係を発展させてきました。本日行われた高市総理とラーマン首相との首脳会談においては、両国が共に強く豊かになるべく、協力を深化させていくことが確認されました。

国家間の関係を真に支えるのは、現場の血の通った交流と、共通の課題に共に向き合う「共創」の姿勢に他なりません。そして、その「共創」の未来を担う主役こそが、他でもない両国の子どもたちです。

どのような環境に生まれた子どもであっても、その可能性が閉ざされることなく、健やかに成長し、自らの未来を切り拓いていける社会をつくること。それは、未来世代に対する私たちの最も重い責任です。

本日のセミナーが、子どもたちのウェルビーイングという普遍的な願いを共有し、保健・医療をはじめとする多様な分野で、両国の絆をさらに未来へ押し広げる力強い第一歩となることを心より願っております。

ドンノバ（ベンガル語で「ありがとうございました」）